

リスクのある通信端末利用が実際にネットトラブルを招くことの検証

—情報モラル啓発活動継続の必要性—

岩森正治（玉城町立玉城中学校）・長谷川元洋（金城学院大学）・中村武弘（南伊勢町立南勢小学校）

概要：中学生が、トラブルに巻き込まれることは分かっているのに個人情報を ID やパスワードに使用したり、トラブルを招くような言動が交わしたりしている現状がある。本研究では、中学生の通信端末利用に関する実態調査の結果から、通信端末利用時にリスクがある使い方をしている中学生がよりネットトラブルに巻き込まれやすいことがわかった。その状況を改善するためには、授業や講演会等でリスクに関する知識を与え、対策の必要性に気付かせた後に、それを行動につなげる指導を行うことが必要であろう。

キーワード：情報モラル教育， 道徳教育， ネットトラブル

1 はじめに

中学校での情報モラル啓発に関する講演会後の生徒の感想の中に、①「僕は自分の ID, パスワードに誕生日や自分の名前を入れているのでとても危険だなと思いました」、②「僕はアプリのダウンロードはあまり親に許可をとらずにインストールすることがあります。このことで請求書が届くようなことがあるので、これからは気をつけたいです」という内容があった。これらのリスクある行動を取ったことがあるという記述は、この感想を書いた 466 名中 56 名いた。

また、これまでのトラブル経験の記述の中には、③「僕の友達がスマートフォンのウイルスに感染したことがあります。それはアプリをダウンロードして開くと感染するものです。…それでその友達はスマホを買い換えました」、④「私はアプリのアカウントが乗っ取られて、勝手に ID とパスワードが変更されそうになったことがありました。そんなとき誰にも相談せずに、そのアプリを消しました」という記述もある。このようなトラブル経験は 466 名中 65 名が記述している。

本研究では、上記の①、②にあるようなリスクあるネット利用に関する問題行動に対して、③、④のようなリスクが起こるのは当然だが、実際それが定量的にどの程度であるかを調査した。

また、啓発は毎年続けているが、依然として克服できていない情報モラルに反する行為をどう捉え、毎年の啓発の取組をどうしていけばよいかも考察した。

2 研究の方法

本研究は、毎年行っている生徒対象の「情報機器利用に関するアンケート調査」から、必要な項目を取り上げ、クロス集計した結果から考察したデータを元としている。

(1) 調査対象（データ数） 有効回答率 97.4%

第一著者の勤務校（以下、本校と表す）

1年：181名(187中) 2年：151名(157中)

3年：158名(163中) 全校：490名(503中)

(2) 調査時期 2017年6月初旬

(3) 主な調査項目

学習時間、人権意識、端末の利用時間や利用する機能、通信相手、利用する時の意識、ネット利用で経験したこと、SNS の利用実態、個人情報の取扱い方等の情報モラル意識等、99項目。

(4) 分析方法

調査項目の中にあるトラブルの元となりうる行為の経験に関して、「経験がある」と回答した生徒と「経験がない」生徒とを比較して、トラ

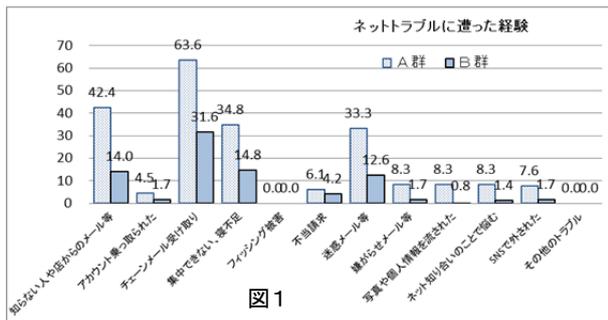
ブルに巻き込まれた経験の有無の割合の比較をはじめ、その他の項目の中から特徴的な差があるものを拾い上げ、考察することにした。

3 結果

(1) ネットや端末で「個人情報の管理が甘い利用」をしている生徒に関して

「他人が閲覧できるサイト（掲示板等）で、自分や他人の情報（名前や写真、メルアド、ID等）を書き込んだことがある」「パスワードに生年月日や電話番号などを使っている」生徒をA群（132名）とし、そうでない生徒をB群（358名 うち端末所有 287名）として比較・分析を行った。

生徒のネットトラブルに遭った経験についてA群とB群の生徒について比較してみると図1のような結果が得られた。



このことからA群の生徒は、「知らない人や店からのメールを受け取っている」リスクがB群の生徒の3倍（A群…42.4% B群…14.0%）、「チェーンメールの受け取り」リスクが2倍（A群…63.6% B群…31.6%）、「迷惑メール被害」リスクが2.6倍（A群…33.3% B群…12.6%）、「嫌がらせメール」リスクが4.9倍、「個人情報を流出させられる」リスクが10倍、「不当請求に遭う」リスクが1.5倍もあったことがわかった。また、ソーシャルゲーム利用でも、A群の「無料なのにお金を払わされた」リスクがB群の3.8倍、「ミニゲームで知らない人からメールが来た」リスクが3.6倍（A群…12.1% B群…3.4倍）にもなっている。

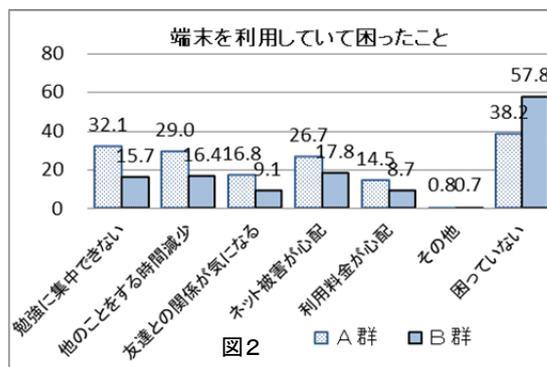
A群の生徒に見られる特徴は、

- ・学習時間は平均的に短い、就寝時刻は遅い。

＜この結果として図1の「集中できない、寝不足になっている」リスクが2.4倍になっているとも考えられる。＞

- ・1日あたりの通信端末の利用時間が長い。
- ・ネットで情報収集する割合が高い。
- ・「端末が手元にないと不安」という意識が強い。
- ・「端末のおかげで友達が増えた」と感じている割合が高い。
- ・「端末を使っていると時間を忘れる」割合が高い。
- ・1日あたりのSNS利用時間も長い。

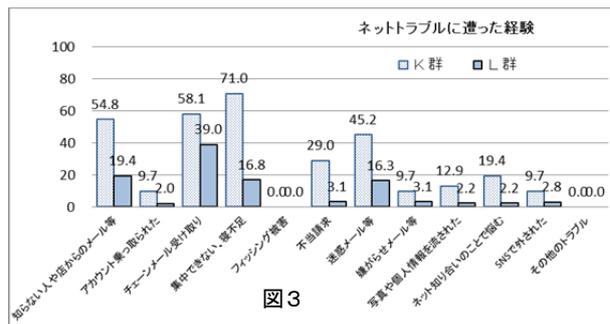
また、端末を利用して困ったことでは、全ての項目についてA群が上回っている。（図2）



(2) ネットや端末を「興味本位に利用」している生徒に関して

次に「親に話しにくいサイトを見た」「人のプライバシーを侵害したり、差別的な内容が掲載されていたりするサイトにアクセスすることがある」生徒を「興味本位に利用している」として位置づけ、それらをK群（31名）とし、そうでない生徒をL群（459名 うち端末所有 388名）として比較・分析を行った。

生徒のネットトラブルに遭った経験についてK群とL群の生徒について比較してみると図3のような結果が得られた。



このことからK群の生徒は、「知らない人や店からのメールを受け取っている」リスクがL群の生徒の2.8倍(K群…54.8% L群…19.4%), 「チェーンメールの受け取り」リスクが1.5倍(K群…58.1% L群…39.0%), 「迷惑メール被害」リスクが2.8倍(K群…45.2% L群…16.3%), 「嫌がらせメール」リスクが3.1倍, 「個人情報を流出させられる」リスクが5.9倍, 「不当請求に遭う」リスクが9.4倍(K群…29.0% L群…3.1%), 「ネットで知り合った人のことで悩んだ」リスクが8.8倍もあったことがわかった。

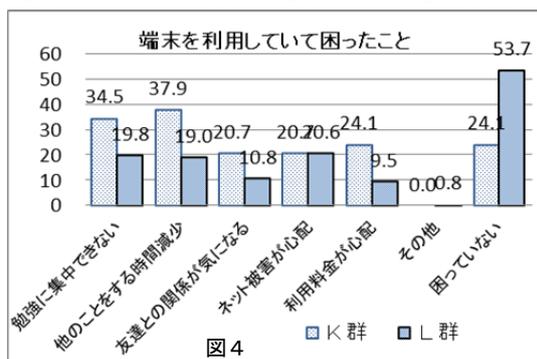
K群の生徒に見られる生活面の特徴は、

- ・学習時間は長い傾向があり, 就寝時間も遅い。
- 〈学習時間は長いのだが, 「家庭学習にしっかり取り組んでいる」では, 肯定的回答の割合が, K群…54.9% L群…76.2%と逆転している〉
- ・「いじめはいけない」と思っている割合が低い。
- ・「学校は安心して過ごせる」の割合が低い。
- ・「相手の気持ちを考えて行動している」割合が低い。
- ・「周りは自分を認めてくれている」割合が少し低い。
- ・「家庭での会話」が少ない傾向がある。

通信端末の利用に関しては,

- ・1日あたりの通信端末の利用時間が長い。
- ・端末でゲームをよくする
- ・端末で動画撮影をよくする
- ・端末を利用する時の相手で, 「ネットで知り合った人」の割合が高い。
- ・端末を使う時の意識 「怖い」割合が低い。
- ・1日あたりのSNS利用時間も長い。等がある。

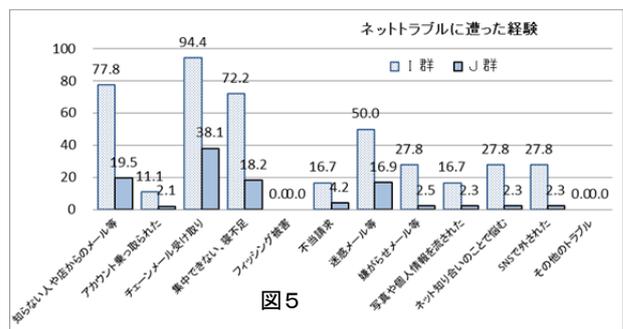
また, 端末を利用して困ったことでは, 全ての項目についてK群が上回っている。(図4)



さらにまた, 定期テストの結果として, K群の生徒は下位群に多いことがわかっている。

(3) ネットや端末を「いたずらや嫌がらせ目的の利用」をしている生徒に関して

「人の悪口やいやがらせのメッセージやメールを送ったり, 書き込みをしたりした」「掲示板やSNS等にうそを書いた」ことがある生徒をI群(18名)とし, そうでない生徒をJ群(472名 うち端末所有401名)として比較・分析を行った。



生徒のネットトラブルに遭った経験についてI群とJ群の生徒について比較してみると図5のような結果が得られた。

このことからI群の生徒は, 「知らない人や店からのメールを受け取っている」リスクがL群の生徒の4倍(I群…77.8% J群…19.5%), 「チェーンメールの受け取り」リスクが2.5倍(I群…94.4% J群…38.1%), 「迷惑メール被害」リスクが3倍(I群…50.0% J群…16.9%), 「嫌がらせメール」リスクが11.1倍, 「個人情報を流出させられる」リスクが7.3倍, 「不当請求に遭う」リスクが4倍, 「ネットで知り合った人のことで悩んだ」リスクが12倍もあったことがわかった。

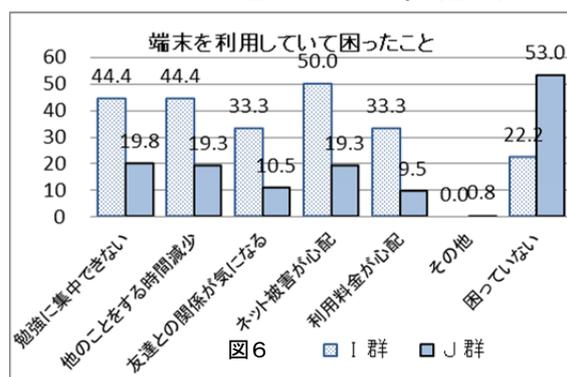
I群の生徒に見られる生活面の特徴は、

- ・学習時間は長い傾向があり, 就寝時間も遅い。
- ・「学校は安心して過ごせる」の割合が低い。
- ・「人権問題を解決しようとしている」割合が低い。
- ・「家庭学習にしっかり取り組んでいる」割合が高い。
- ・「誰とでも気兼ねなく交流できる」割合が低い。
- ・「自分にはよい所がある」の割合が少し低い。
- ・「家庭での会話」が少ない傾向がある。

通信端末の利用に関しては、

- ・ 1日あたりの通信端末の利用時間が長い。
- ・ ネットで情報収集をよくする。
- ・ 端末でカメラ機能をよく使う。
- ・ 端末で動画撮影をよくする。
- ・ 端末を利用する時の相手で、「ネットで知り合った人」の割合が高い。
- ・ 端末を利用する時の相手で、「学校外の知人」の割合が高い。
- ・ 食事の時に情報端末を手元に置いている割合が高い。
- ・ 1日あたりの SNS 利用時間が長い。
- ・ ネット利用時のマナーやモラルを大切にしている意識が低い。

また、端末を利用して困ったことでは、全ての項目について I 群が上回っている。(図 6)



さらに、定期テストの結果として、I 群の生徒は上位群に少ない結果が出ている。

4 考察

ID やパスワードに個人情報や生年月日を入れる理由の1つは、「忘れない」とか「覚えやすい」という利便性やわかりやすさを優先する心理が働いていると思われる。利便性とリスク管理のどちらを優先するかは、リスクの見積もり方によって変わってくる。他に考えられる理由として、ID やパスワードをうまく作ることができず、個人情報をそのまま ID、パスワードにしてしまうことがある。自分のアカウントが乗っ取られると友人に迷惑がかかる可能性があることや適切なパスワードの作り方を理解させる必要がある。

見破られる可能性の高いパスワードを設定していたり、興味本位に情報にアクセスしていたりするなどしている生徒は、自己の生活に好ましくない影響が出てしまっている。そのことを自覚させ、適切な使い方を考えさせることが、主体的に情報機器を使いこなすことができるようになるために必要であろう。

5 結論

「はじめに」で述べた情報モラル啓発講演の後の感想には、リスクある行動の記述に続けて次のような記述が多い。「私も実際に同じパスワードを使い回したり、自分の誕生日を設定したりしていたことに気がきました。これを機にパスワードはなるべく長く、複雑なものにしようと思いました。」「私は無料のアプリで『いいな』と思ったアプリは安全かどうか考えずにじゃんじゃん入れてしまっています。ウイルスにかかるといけないので今後気をつけたいです。」

これまで、情報モラルの啓発の必要性が理解され、そのための取組がなされてきたが、実際にはまだ問題行動が発生してきていた。つまり、その啓発活動が、功を奏してきたかどうか問われる感があった。授業や講演会等でリスクに関する知識を与え、対策の必要性に気付かせた後に、それを行動につなげる指導を行うことが、学んだことを生活に生かす生徒が増えると期待できる。

今後、情報機器の使い方が自己の生活に影響を与えていることに気付かせたり、リスクの判断について考えさせたりし、情報機器を適切に利用できるよう指導していきたい。また、道徳科等における指導方法の開発も行いたい。

付記

本研究の一部は、科研費：課題番号(17K04887) 基盤研究(C)「道徳的価値と資質・能力の育成を基盤とした情報モラルの指導法に関する研究」(研究代表：長谷川元洋)の研究の一部として行った。